

1919年7月7日

鉄条網の外と同じく、鉄条網内でも体操団の競技会にはそれに対応する批評も当然ある。競技会への準備には我々の競技会への批評をする人を見つけておくことも含まれるが、その準備作業後、私はオイヒラー曹長を訪ねた。彼には別の折にある方から、我々の体操の催しについて一筆書いても良いと申出があったのだ。しかしオイヒラー曹長からは、当該の方は批評をむしろ専門家に書いてもらうように薦めるかもしれないとの考えを示された。そこで私は、体操その者のためには直接適任の人の元に行くのが一番であると思った。その時考えていたことは、専門家の文筆によって再開後のわれわれの体操の良い点と悪い点に何があるかを、聞きたいということであった。ヤンセン氏は、ためらいながらも参加者の狭い範囲に向けて批評を書くことを約束してくれた。以下に、体操競技会についての彼の意見を掲載する。

1919年6月1日開催の板東収容所体操クラブの

体操競技会についての批評 体操教師ヤンセン

ムックス氏から19年6月1日開催の体操競技会への批評をお願いされた。こうした発言を私からするのはややもすると誤解を受けやすいので、その決心をするのは気が進まなかった。そこで前もって強調しておくが、この批評は単純に事実に基づく見解と発揚を目指そうとするものである。[117] 個人的な攻撃をする意図などはもちろんない。体操競技会には確かに大きな利点がある。しかしその前提となるのは、できるだけ広い範囲から来る別々の団体である。というのも、大きな範囲でしかある種の等価性というものを経験できないからだ。地方体操会、郡体操会、ドイツ体操祭は範囲は広がっていくが、そのような選別を意味している。団体内での体操競技

会につきまとう欠点は、団員全体の参加を考慮すると成績の範囲が演技で課される必要な点数分広くなってしまうことだ。判定基準を別々にして2つの階級に分けるというのは、実際この欠点か生まれたものであるし、今回の場合のように、たかだか2,30人の選手がそのテクニクの点でもわずかの等質性もなく競技を行ったならば、先入観なしに見物する人は誰も、肉体的な成績の評価基準に設定された演技の習熟などは論外であると認めざるを得まい。この非難は個人に向けられたものではなく、このように小さなサークル内で成績をある規範に従って評価しようとする考え方そのものにある。さらに付け加えるならば、このような催しには、見知らぬ人の未知の成績を使って技能を測るという刺激がない。実際後者の場合の競技会の結果は、期待していた順位に届かなかったとき、体操への熱意をかき立てるものとなったのである。十二種競技を見るに、大衆的な運動が器具体操のためになおざりにされているようであった。

審判団が演技の評価についての指示を受けていたかどうか知らないが、点数のつけ方の「寛大」なことが目についた（私は気付かれないようにひとりの審判の肩越しにリストを見たのだ）。不完全で失敗した演技がともかくも好意的な評価を受けていた。特に第2チームとシニアチームで体操競技上の違反があった点は「体操競技」というユーモア短編のネタになりそうなものであった。それにはきれいなイラストを付けるべきだろう。ぜひとも全ての種目の目的について心することをお勧めする。なぜならば種目をマスターする兆しとなるのは良い心がけであるからだ。自由演技で連続技を見せることには大きな身体的価値はない。連続技は美しく軽やかにできるのは向上心のある体操選手の目標であるべきではあるけれど、部分部分が未完成なものはダメなのだ。たとえば前方大回転の後、足をくずして側面着地するよりは、逆手伸身振動を完璧に行う方が良いのだ。ここの体

操サークルに対しては、平行棒や鞍馬では支持技がどうやら好まれているようなので、より大きな正確さを求めることをお勧めする。なぜならこの演技は、重労働を行う人を見れば良く分るように肩と背中の筋肉の調整を行うのに役立つからである。こうした邪魔な影響は、これらの演技と懸垂・助走・跳躍の練習を十分に行いつつ、姿勢を意識して保つことによって排除しなければならない。スウェーデン体操の本質は、こういった猫背になりがちな肩と背中の体系に対する戦いにあると言える。スウェーデン人とこの体操を好む人たちはその際、正しく行えば優れた姿勢の訓練になる徒手体操にもかなりの時間を費やす。わが国の専門誌上での「ドイツ式かスウェーデン式か」についての活発な議論はその結果として、最近体操団体が徒手体操により理解を深めつつ目標を見定めてそれを活動に組入れるようになった。それを促進する目的でドイツ体操クラブの競技会に徒手体操の規定演技と全体徒手体操への参加が取入れられた。当地の体操サークルで徒手体操が特に盛んであるとは見受けられなかったので、難度の高い徒手体操の規定演技を推進するための前提条件つまり計画性のある練習により獲得した修練が欠落していたわけである。確かにひとりの体操選手が競技の前日、個々の運動の順序を頭にたたき込もうと絶望的なほどに取り組んでいるのを見はした。上級者の規定徒手体操の演技が非常に残念であったのは不思議なことではない。この演技を行わなければきっと良い得点が得られたであろう。その折に気が付いたことは、全体の外面的な形にほとんど配慮がなされていないことであった。部門の非公開業務がどこでも見られたわけではなかった。観客の抑制はどうやら考慮されていなくて、演技の判定のために一番良い場所が一部審判団に利用できなくなっていた。

かくして厳しい基準をあてはめると、多くのことが出てくる。この体操競技の特殊性によって変えることのできないこと、慎重な運営をするとす

れば避けなければならないことである。私は、体操をする人たちにとってまず重要なのは、再度収容所の人たちの注意を器具体操に向けさせ、身体強化のこの分野への参加を得ることであるかのような印象をいただいていた。この意図はまったく賞賛すべきことであり、ある程度は演技の不均一さや不完全さへの言訳にはなる。しかしながら体操が仲間を集める目的に使用したいならば、全体の外面的な枠組にもっと大きな価値を置かねばならない。勢いと思い切りの良さによって目を楽しませるべきなのだ。--- この収容所の体操仲間は、活発であった 1918 年夏の比較的短い期間をのぞき、狭い範囲にとどまっていた。この現象の原因をつきとめようと試みた。松山と丸亀、久留米で体操が熱心に行われていた事実から場所の問題が大きなウェイトを占めていることが示される。そこでは利用できる場所が小さくてほとんど体操しかできないのに対し、こちらでは広くいい場所があってあらゆる種類のスポーツが可能なのである。

多くの人が体操の高く道徳的な謹厳さと必須となる外面的な束縛より、身体を動かすゲームの明るく個人的な自由を好んだことは良く理解できる。ことに、いつ終るともしれぬ捕虜生活が意志の精神的緊張をゆるめたこと、また戦争の悲しい結末が生活基盤の崩壊と高い希望の消失をともなって、作業（仕事）そのものやその他のことを行うための理想的な勢いを奪った考慮するならば致し方ない。なぜなら、体操は通常の人間的な仕事とならび国民的な仕事でもある。それゆえに人類と自分自身の民族にほとんど絶望しかけているというときに、仕事への喜びと雰囲気はどこから得られようか？さらにもう一点。ドイツにおける経済的・社会的な生活の大発展に際して精神的な教育のために新しい、現実的な基礎に基づいた形が求められていたように、肉体面でも形式的な訓練に対する反感がますます広い範囲の人々の間で広まり、一般の人に分りやすく、計測によってその瞬間の成

果が分りやすくなるような自然な体操による、より現実的な身体形成を求めるようになった。器具体操には確かに大きな利点がある。なるほどその効用については、例えばスウェーデン体操ほどには科学的な裏付けができない。おまけに複雑すぎるのだ。しかし器具体操は何らかの意図的な刺激にもとづいて目的にかなう筋肉群を動かすという完璧な筋肉トレーニングを目標としている。他のどんな身体テクニクよりも高度に精神の肉体への支配を促進する。巧みになるのである。しかしトゥルネンという概念を一方的に人の作った器具における技巧的運動の体系と理解してはならない。これは残念ながらしばしばあることなのだが、この理解の仕方の歴史的原因は、政治的な理由でトゥルネンに対して行われたいわゆる体操排除(Turnersperre) (1820-40) に一部起因する。トゥルネンはヤーンがつとに言明していたもの全てを包含するわけではない、という考え方に馴染まねばならない。準備体操、器具体操、ギリシア人が作った古からの身体運動、ゲームや山地歩行に水泳も、要するにその目的の達成に使えるもの全てである。

親愛なる体操家よ、この批判に賛成するか反対するかは君にゆだねることにしよう。

私個人としては、われわれの体操の問題に対するそのような厳しくはあるが客観的な批判は、われわれの成績についてのそれほど事実在即していない美化された描写よりも役に立つと、ずっと思っている。

収容所漫筆の筆者はこの体操祭を見なかった人のために次のような記事を書いている。

28 人のエルザス人がわれわれに背を向けたその日の午前中、ここでは真にドイツ的な祝祭、すなわち体操祭がおこなわれた。もっとも、このスポー

ツに全身全霊没頭して、12種競技に参加したのは27名の体操選手だけだったが。器械体操は、これまでの成績からわれわれが当然期待していたほど素晴らしいものではなかった。おそらく競技が早朝におこなわれたせいであろう。それで、意地の悪い噂によれば、ある者は一通り競技が終わってしまった後ようやく目覚めたそうだ。幾人かの初心者は、少し上がりすぎたのだろう。そのせいで彼らの体操は、少なからず出来がよくなかった。これに対し、熟達者たちは落ち着きはらっていて、それが彼らの素晴らしい成果を確実なものにし、高得点でもって評価されることとなった。ほとんどすべての競技者、つまり8人の参加者のうち7人が、150点満点のうち100点以上を獲得した。

一般体操での成績は非常によかった。フェルヒネロウスキーはこの部門で老練な卓越性を示した。跳躍台なしの高跳びで、彼は1.65メートルを跳び、石投げでは7.30メートル投げ、棒幅跳びでは7.35メートル跳んだ。

この催しは好天に恵まれてかなりの観客が集まり、実に陽気な雰囲気となったが、それはM.A.吹奏楽団の元気な楽音によっていっそう賑やかなものとなった。夕方には20人の勝利者が非常に素晴らしい賞状を手渡され、9人の優秀選手が柏の栄冠を頭上に授けられ、体操家の古くからの慣習によりこの行事を祝ってしこたま酒が飲まれた。朝から晩まで体とのどを使ってこの催しに参加していた幾人かは、翌日になっても歯磨きをしながら勝利した競技のことを歌っていた。「とにかく素晴らしいお祭だった」と。われわれの憂鬱症患者であれば、もうひとつの陽気な体操家の歌を、これからもずっと肝に銘じて覚えておくことができるだろう。それは、「体操は最上の薬」というものだ。

1919 年 7 月 10 日

体操競技会の後数日間は、安堵感、緊張からの解放があった。緊張というのはもちろんこれまで述べてきた催しがもたらしたものである。この時期、われわれは自分たちのことをまた考える十分な余裕があったが、それは必要なことだった。なぜなら、われわれの中の二人の人の誕生日に何か思いがけぬことで喜ばせなければならなかったからだ。おそらくわれわれは、この二人のために今回もぴったりのことを見つけた。6 月 7 日の早朝、第一チーム代表としてオイヒラー曹長とムックス、マイが誕生日の花束を持って板東南西区に行き、彼らの体操仲間ベーフィングに彼の夏の住まいで第一チームからのお祝いを述べた。そのさい彼らは、われわれが体操を楽しんだ時期の思い出に、われわれの捕虜生活におけるさまざまなタイプの人間を描写したムッテルゼーの素描集を、この芸術家がみずから特別に描いてくれたわれわれの体操場の線画を添えて、手渡したのだ。

さらにドアの敷居の上で私は例によって詩を思いつき、次のように始めた。

われらの願いは、この素描集でもって

君がこれからずっとできるかぎり楽しんでくれること。

この二行詩にも例によって引っかけりや詩脚がないわけではないが、それでもこの詩はだいたいのところ肝心の瞬間の雰囲気作りに役立った。

祝うべき二番目の誕生日は、われらがフォラントの誕生日だった。そのお祝いの経緯については、私が報告を依頼していたオイヒラーが、次のように書いている。

われわれは、敗残兵たちが孤立した持ち場に集まるように、スポーツから締め出されてしまった体操のもとに集まった。そして、1918 年から 19

年にかけての冬のあいだ、「体操場」の「鞍馬」のところで忘れえぬ幾時間かがわれわれ相互をいっそう親密に結びつけた。もしかするとこれらのことは、捕虜生活の状況のせい、鉄条網に囲まれた場所でのわれわれの体操の運命のせいだったのかもしれない。しかし、そこで私は言いたいしそう考えてもいるのだが、次のことも偉大な背景を持つドイツ体操の本質の中にあるのかもしれない。すなわち、ドイツ体操の理念において互いに手をさしのべ合う人々は、あらゆる種類の芸術作品に接して一時間練習しようとする人々よりも多いのである。体操家たちは、まなざしを明るく自由に遠くの背景に、大いなる最終目的に向けて、ともに手を携え、身体的な鍛錬の道を、身体への配慮の道を、歩むのである。この身体とは、魂の入れ物であり、わが国民全体の最後の運命やそのはるか先にある最終的な未来もこの入れ物の中に含まれているのだ。そしてそのような考えは、われわれをやはり相互に近づけずにはおかない。それどころか私は告白せずにはいられないのだが、このような考えを抱いた共同体は、血よりも強くひとを結びつける。このような考えは、個々の人間をして自分を超えて高めさせ、それを抱くすべての人々を鼓舞して、われわれの知るあの最高の共同体形式へと至らしめるのだ。その共同体形式とは友情であり、すなわちフリードリヒ・ニーチェの言う意味で相互に矢であり憧れでもあるような人間の関係である。肩を組んで遠くに輝く大いなる目的をめざす……われわれの民族の力、健康と自由をめざす戦士たちの関係である。

ごく手近に日常に光の中で見るとすれば、そのような関係は、戦友同士の連帯の精神、相互援助や相互関与の精神を通して現れている。われわれはしばしば、こうした精神にわれわれの仲間全体のための誕生日のお祝いによってひとつの形を与えた。しかし、われわれが楽しくビールを飲みながらすすむとき、皆でうたう歌が相互の友情の表現である必要はまったくな

い。そんな必要はないと私は言いたい。そのような機会にわれわれの体操家の歌をうたうとき、われわれの心の奥底の琴線がいつも共鳴していたということが、われわれの体験だったのだから。

さて、それからわれらがフランツ・フォラントの誕生日がやってきた。この誕生日には、他の陽気な祝祭以上の何かが漂っている。それは、仲間のだれかがわが国のヤーンよりも、外国の神バッカスに入れあげてしまわないかという一抹の不安である。これまでの誕生日のお祝いの準備にともなった楽しげなせわしなさが、終止和音が省かれたような「いつまでも終わらなさそうな」気分を与えたとするならば、このお祝いには、お別れのような、時の流れがさらってゆきかねない諸々の心像をとどめておきたいという思いのような何かが、皆でいっしょに歩いてきた道をふりかえる思いのような何かが、漂っていた。

われわれはあれこれと相談した。また企画し、拒否し、計画を立て、変更し、嫌がり、また許し、非難し、しかし最終的にはお祝いをした。これこそは、この誕生日のお祝いを他のお祝いから際立たせる、偉大なる「結局は」なのだ。

その朝、賞状が役員から手渡された。芸術家はこの雰囲気に関心でいらなかった。収容所の外で日本人のお針子が刺繍したギターストラップには、「君の友人たちより」と「板東第一体操チーム」と書かれていた。晩の祝宴は、皆でジョッキが揺らされ詩興がのってくるとルフの「マヨネーズ和えのジャガイモの詩」とともに進行した。また、丸亀から現在に至るまでの体操活動全般の念入りの回顧もあり、これはわれらが尊敬すべき老練な名手ヴィレによって描写され、期待通りだった。午後に雨が降って、夕べの部分を台無しにしかねなかったが、そのあとは心を和ませるような日没の静けさの中で、上記のことはおこなわれた。

しかし全体として見れば、やはりこのお祝いには何か特別なものがあった。はっきり言ってこのお祝いは、これまでのすべてのお祝いよりも、まさにその象徴的な背景によって、ずっとよいものとなった。

オイヒラーは、ギターにつけるストラップに次の詩行を添えた。

親愛なるフランツよ。きずなはもっと多くのことを言う。
 きずなの意味はもっと深い。
 きずなは、心の奥底の思いの
 現れであり、しるしなのだ。

故郷を遠く離れて、日本の国で、
 体操はわれらをひとつにする。
 われらの心のまわりに、友情のきずなが結ばれる。
 けれども体操や飲み会や歌のとき以外でも、
 友の手を感じるがよい。

友であることはそれ以上のもの。救いであり、幸^{さち}なのだ。
 友情は、遠くの目的地に向かう
 憧れであり、矢なのだ。
 友情とは、人生の道をともに歩むことだ。
 ここにある深みを避けて
 あそこの幸福へと近づくことだ。
 それは目前にある大いなる目標であり、
 光をめざす戦いであり、
 とともに力を用いることだ。
 友情、それは義務なのだ。

それゆえ、年を経て
 きずなが色あせてギターから垂れ下がり、
 静かな楽の音^ねが過ぎ去った時を想起させるとき、
 しるしが輝きを失っていようとも、そこから
 われらの熱き願いはなおも君に付き添うだろう。
 体操家の十字章から、
 この円居の友らが、楽しく自由に
 君に挨拶するだろう。

マイも次のような詩を作った。

誕生日を迎えたひとに

ゲート・ハイル、と今日君にチームは
 呼びかける。「男の勇氣、男の力よ。」
 チームはこの挨拶を皆で
 誕生日を迎えた親愛なるひとに贈る。

けれどもこの挨拶だけでは
 今日われわれは満足できない。
 すぐにこの言葉の意味を示せねば
 ならぬ。気がかりなひとよ。

君はいつも元気で敬虔で明るく自由だった。
 われらの体操のさいに勇氣と力にあふれていた。
 けれどもこの頃は、戦友よ、
 君はずいぶんと氣落ちしていた。

何ヶ月も前から、君がビールを飲んで
過ごした幾多の夜は、そうだった。
ひどく眠たげにだらしなく、君は体操に来た。
父なるヤーンに対して悲しむべき姿だ。

諸々の器械、鞍馬、平行棒、鉄棒は、
君にはなんの役にも立たなかった。
民族体操のときはまったくそうだ。見ればわかった。
ビールを飲むことで君が力を浪費しているのが。

だから今日は君に約束させたい。
ふさぎの虫を追い払ってしまえ。
ここにわれらの手をとって誓え。
われらが旧友、フォラントに戻ることを。

その言葉をしっかり守ってもらいたい。
友情と音楽とスポーツを思い出してほしい。
ギター楽団が彼らの奏でる音の挨拶で
君に音楽の喜びを与えんことを。

さて最後をお願いしたいのだが、
もう一度誕生日の挨拶を聞いてほしい。
「ゲート・ハイル」と君にチームは
呼びかける。男の勇気、男の力をもつ君に。

クッデル

1919 年 7 月 20 日

7 月 12 日に幹部より集会が招集されていて、議事日程は次のとおりであった。

1. 会計報告
2. 議事録の読み上げ
3. その他

会計報告により支出超過が明らかになったが、それは 7 月の特別会費によって補填されることになった。前回 5 月の集会の議事録については、異議はなかった。一方、「その他」についてはかなり活発な意見交換がなされたが、それは他の細かい点を除けば、主として体操競技会についての批判に関わるものだった。かなり多くのメンバーたちが自分の問題を落ち着いて述べられなかったのは、おそらく狭い部屋の蒸し暑さによるものだったろう。自分が批判されていると感じていた人々がうれしくなかったのは理解できる。しかし不思議なのは、彼らの不機嫌がこの批判をした人に向けられたことだ。過半の人々は批判がもしかすると当たっているかもしれないと考えはしたが、それにもかかわらず不満は残った。これによって、もはや誰も幹部を続けたがらないという事態にさえ至った。信任投票がおこなわれてようやく腹を立てていた人々は分別を取り戻し、興奮の波は徐々におさまっていった。ここでそれほど問題にはされなかったチームの新しい編成については、模範演技者たちの会議に任され、集会は慌ただしく終えられた。

7 月 14 日、模範演技者のルフ、フェルヒネロウスキー、フレンダー、ムックスが、上記の会議のために集まった。

まずチームの編成がなされた。第一チームにはケッテルマイアー、ケー

ラーが、第二チームにはヘルムス、ケンツォラ、オファーゲルト、シュター
ル、メラー、オイルナーが迎え入れられた。

第二チームからはゾボトカ、ゼーゲルケンが、第二チームからはマイアー
が通常メンバーではなくなり、この三名は名目上のメンバーとして登録さ
れた。

第一チームの強化がなされねばならなかった。なぜなら数人のメンバー
が、軽い肉離れのために体操を控えなければならなかったからだ。これに
加えて、7月11日の金曜日、O. マイがホッケー競技のさいに負傷したが、
おそらく長期にわたって体操への参加が難しくなるだろう。

最近幹部たちの協力がうまくいかなかった原因について合意を得るよう
な話し合いがなされた。全員が理解したのは、メンバーの分裂はわれわれ
の体操の威信と存続を損なうだけかもしれない、ということだ。体操その
ものへの愛によって、われわれは狭い見を乗り越え、各人は自己のなす
べきことを果たしつづけよう、ということになった。

この件が片付いた後、ムックスによって送別の体操会が提案された。こ
れについてはすでに今、ひそかに準備がなされているとのことで、それは、
われわれの旅立ちの日について公示があり次第この体操会を開催できるよ
うにするためである。これについては誰もが了承した。それぞれのチーム
に練習を課すことは、各模範演技者に委ねられることとなった。

これまで障害になっていたことは、この会議で取り除かれた。われわれ
の捕虜生活の最後に至るまで体操をやり続けようという精神によって、皆
貫かれていた。

かつて高揚した気分の折にフェルヒネロウスキーが言い出したあの格言
を、われわれはいつか誇りをもって言うことができるだろう。

われらはいそしんだ。

辛苦のときに
ドイツの体操に、
一丸となって。

1919年8月13日

そもそもわれわれが体操をやってきたこの数年、深刻な事故はほとんどなかったといってよい。ホッケーでの怪我によって体操ができなくなったマイを別とすれば、ヘルムスだけがついていなかった。彼は7月29日、幅高跳びのさいに補助があつたにもかかわらず不運にも着地に失敗し、そのさいに膝を痛めて約3週間医務室で過ごさなければならなかった。

7月27日から30日にかけて、演劇委員会によって「催し物の夕べ」が開催された。その第一部において、第一チームの模範演技者H. ルフの指導のもと、フェルヒネロウスキー、フレンダー、フェッターにより、吊り輪の技が披露された。また第二部では、ルフとフェルヒネロウスキー（前者は女性に扮して）が軽業師として登場した。吊り輪の演技は、見物人たちに本当の驚きと心からの賛嘆を惹き起こした。軽業師たちが示した演技も、ある意味で偏りはあつたが大いに受けた。あの数日間ほとんど例外なしに、「催し物の夕べ」全体の中で体操がやはり最高だったという声が聞かれた。

それ自体かなりよかった体操の成果への評価とならんで、支配的であつた考えはおそらく、この夕べの歌や茶番劇がわざとらしく不自然な出し物だったのに対し、これらの体操の演技は鍛錬され育成された能力の表れだったということである。